

昔の海外・こばなし-2

佐々木 実

(昭和29年工業化学科卒)



◎ドイツ

ハンブルグ郊外にある農村に業者の2人を連れて出張した。スーパーでじゃがいもやみかんを買って小さな袋や赤いあみ袋で包装しておくが、その包装作業は当時日本では女の人手でやっていた。それを機械でやる包装機械メーカーが、そのドイツの農村にありそこに行ったのである。業者とはその機械を全農などに売るのが仕事で、我々商社はドイツとの連絡や機械の輸入業務の担当である。

ドイツのメーカーは、広大なじゃがいも畑が広がる農村にあった。その農村には我々が泊まったホテルが一軒あり、道路に面した一階にレストランがあり、テーブルは道路にはみ出している。そこに毎日夕方になると老人達が10数名集まり、ビールの大ジョッキ一杯だけでおしゃべりして楽しんでいるのである。ドイツは世界で一番多くビールを飲んでいる国であるが、日本とはかなり違う。日本人は4大ビールメーカーのビールを飲むが、ビール好きなドイツ人はその町村の地ビールを飲むのである。各駅停車の駅の小さな町村ごとにビールがあり、それぞれの旨さが微妙に違っており、その土地の人がおらがビールと自慢し誇りにしているのである。

10月末ごろドイツに行ったのであるが、東京の服装とコートもなしで出かけたので、天気の良い日にハンブルグの市街見物に出かけたら、寒さに震え上がって見物どころではなかった。じゃがいもの生産地は北海道なみの北国なのである。

ドイツのおみやげはやはり包丁が一番であり、業者の人は5~6本買って飛行機の機内持ち込み荷物に入れていて、空港の係員をびっくり仰天させていた。

ドイツのメーカーの社長さんが、その後日本の農産物の包装状況を見るため来日してきた。勿論我々は大歓迎しスーパーや包装現場などに案内し、また銀座を飲み歩いたりもした。社長さんからおみやげのクラシック音楽のテープを頂戴したが、まさにドイツ人らしい実直な教養人であった。

◎南アフリカ

政府系の化学会社に、日本のコンプレッサーなどの機器がかなりの数が納入されており、その部品などを毎年定期的に受注していた。南アに強い我がロンドン支店の協力を得ながら南アの我が支店とやりとりしていたが、南アに一度出張することにした。ロンドン支店から若い人が同行してくれた。

南アは、昔イギリスの植民地でありイギリス系の白人によるアパルトヘイトという国民たる黒人に対し露骨な人種差別をしており、国際的に非難され孤立していた。しかし日本人は名誉白人と認められ日本は南ア政府・企業とは良い関係であった。昨年この会報に我が駐在員が豪邸に住んでいることを書いたが、後でこの国から追い出されたイギリス人の屋敷だったのである。

南アにはロンドンで飛行機を乗り継ぎ、また7時間も飛んで到着する長い旅であった。南アの会社の本社に着くと、大きな建物の正面玄関の上に高々と日の丸が掲げられており日本からの私を歓迎してくれていた。この出張のお土産として千数百円のカシオの電卓を10個ほど持参したが、1個を事務員のおばさんに日の丸のお礼だと言ってあげたら目を丸くして驚いていた。その後方々にある工場に行き、案内や打ち合わせでお世話になった偉い人にも電卓をやったらとても感激してもらった。この国では電卓など入手できない貴重品であるようだった。

南アの数ある工場に行ったが私が今でも強く印象をうけたのは、工場の中ではなく工場の外の風景である。工場の外は必ず地平線が見

える広大な土地がひろがっており、その中に塀で囲まれた工場がぽつんとあり、大きな面積であるはずの工場がただの点になっていることである。地平線の見える広大な土地には草や木もなく黒い土の色で、小さくうねっており地平線まで続いているのである。車で1時間も走り着いた次の工場の外もやはり同じ風景なのである。会社の車の運転者は黒人で私に日本のガソリン代や失業率を聞いたのを思い出した。南アは世界で1番道路が長いとのこと。これは黒人の雇用対策として広い国土に道路を建設したからだという。南アの首都ヨハネスバーグの繁華街に行ったが都市とは見えず、ごちゃごちゃしていた。郊外にある黒人の住居はかなりひどかった。ライオンなどの動物を見に行ったが、そこは草原であり少ない木の下でライオンが群れて寝転んでいた。その時の車で他の動物も見ただけであるが今は全く覚えてない。

南アフリカからの帰りに出張報告するためロンドン支店に立ち寄った。

◎ロンドン

金融街シティにある支店で責任者への挨拶と報告は30分で終わった。お昼の会食をと言われたが11時前だったので遠慮して外に出たら直ぐの所にセント・ポール大聖堂があり、入り口が開いていたので少し入り広大な寺院の内部を見ていた。直ぐ日本人の牧師が出てきて、にこやかに日本人ですかと話しかけてきた。これは自分を警戒して出てきたと感じたので直ぐ退散した。これでもあのチャール皇太子と故ダイアナ妃が挙式をした教会を見聞したことになるのである。

その夜日本料理店で一人食事していたら5~6人の日本人が入ってきたのが遠くに見えて、その中に昨日まで南アに私と一緒にいた若者がいるのが直ぐ分かった。彼らの席に顔をだして挨拶するのも気が引けたので、店の女の子に若者の名前を云い佐々木が食事しているが挨拶は遠慮すると伝言を頼んだ。食事が済んで勘定しようとしたら私の食事代は日本人の集団からすでもらっているとのこと。南アで彼には大部ご馳走したのでまあよいかとした。朝30分で仕事も済んだし、初めてのロンドンなので2~3泊見物して帰ることにした。

次の日いわゆるハトバスに乗ったらそれが例の赤い2階建てのバスであった。2階の前の席には各国の言葉で聞けるガイドの機械があったが、音を出して聞くので付近の人々にも聞こえる。そこに5人ばかりのおばさん達が来て隣付に席をとったがイギリスの田舎からロンドン見物にでたお上りさんであった。おばさん達は聞いたこともない日本語のガイドを聞いている私すなわち日本から来たお上りさんが、余程珍しかったとみえてバスの外に広がるロンドンの市街には目もくれず、ただただ日本人のお上りさんを、いつまでも注視しているのには全く参ったのである。このハトバスでどこを見たかは全く覚えていないが、地図を頼りに市街をかなり見て回ったことは覚えている。大英博物館にも行きエジプトの古代の発掘品が数多くあったのが印象に残っている。

◎イタリア

1人で出張したのは、化学プラントの機器をミラノの近くの製造メーカーに発注したが、納期が遅れそうなので、その現状を把握するためである。

日本からの航空機はローマ空港に着くのでローマに2泊し観光してミラノに移ることにした。ローマの市街をかなり歩き回り例のおなじみの観光スポットを一通り見た。後日塩野七生著の「ローマ人の物語」の大作が出て全巻読んだが、歴代の皇帝がローマに於ているいるな政治をやりローマ帝国を築いてきた歴史小説であり、私がローマ市街を歩き回って見たことがとても役だったのである。

ローマからかなり北にあるミラノに移り我が支店に出社したら、支店の窓から20メートル先にドゥオーモがそびえ立っていて、そこがミラノの中心地のドゥオーモ広場であった。ドゥオーモとはミラノ大聖堂であり、



ミラノ大聖堂

19世紀の100年間もかけて全ての外観の装飾を仕上げた寺院で、その外観はあまりにも美しくただただ唖然とするばかり。検索によると135本の尖塔があり天辺にはひとつひとつ聖人が立っていて一番高い尖塔には金のマリヤ像が輝いているとのこと。寺院の内部はちらっと見ただけである。大戦のときミラノは爆撃を受けたが、このドゥオーモ付近は京都並みに爆撃はなかったとのこと。

近くにオペラで有名なスカラ座がありそこでマーラーの交響曲巨人を聴いた。一階の席から見上げると豪華なバルコニー席が階上に並び取り囲んでおり、天井はみごとな絵で装飾されていた。

イタリア料理はおなじみであり本場はさすがに旨く、調子によって食べ放題をしたら帰国後手持ちのスーツが全部着れなくなっていた。ミラノには30日も居たので土・日曜日は何もすることがなかったので、列車の一人旅でフィレンツェとベニスに行った。テレビにフィレンツェのことが出るとかならず赤い丸屋根の大きな建物が中心にでてくる。それはこの街の象徴のサンタ・マリア大聖堂であり、この街で一番高く大きな建物である。内部は広大でみごとな壁画で飾られている。しかし私が今でも印象深いのは、とても狭く薄暗い木造のらせん階段を苦勞して登り、赤い屋根の天辺にある小さな塔の展望台にたどり着いたことである。フィレンツェはミケランジェロの歴史的な街であり彫刻も見た。

ベニスに着くといきなりサン・マルコ広場に立っていた。おなじみのゴンドラが行き来する水路の多い狭いベニスの市街をかなり歩き回った。後日キャサリン・ヘパバーンの出た映画の「旅情」を見たとき、まさに私の見たベニスを旅情たっぷりに見て感動した。一人旅で列車にいと乗ってくる乗客がコートを抱えてくるが、みんながみんなコートの裏地のほうを出して小さく畳んでおり、日本とは違うなあ気がつく。どうでもよいことは今でも覚えているのである。



ベニス・サンマルコ広場で (53歳)

◎パリ

3回行ったがドイツからの帰りに立ち寄ったのと、2回は出張であるが何の仕事であったかは覚えていない。

パリ支店は凱旋門の近くにあるのでホテルもその付近にとった。支店の仕事は5時に終わるので、夕食をとるのでも凱旋門通りに出て散策した。凱旋門の屋上に上がりナポレオンのメダルを買ったことを覚えている。通りの先にはルーブル美術館がありよく散策したが、夕方と休日しか行かないのでルーブルには入ったことがないのは残念なり。

オペラ座の近くで食事していたら日本人のおばさん達がどやどやと入ってきて、店の人が席を案内するのも無視し日本語でここがいんだよとわめき、入り口の近くの席に倒れるように座った。ツアーで来て短い時間であちこちと忙しく連れ回されたくたに疲れ果てたなれの姿であった。

例のハトバスにも乗った。ヴェルサイユ宮殿に着いたら日本人の女性が私を探し出してガイドしてくれた。ハトバスの人で宮殿で待っていて名簿にある日本の客にガイドをする係であった。宮殿では鏡の間と宮殿の裏に広がる庭園が印象に残っている。後日ルイ皇帝のでるフランスの歴史を読むときに役にたった。日本の多くの画家達が昔パリで修行し住んでいた街を見たことも覚えているが、歩いて行くわけがないのでこのハトバスで見たのだろう。エッフェル塔の付近を歩いて回ったこと覚えている。

◎イラン

三井グループが大きなプロジェクトをやったことを前に少し書いた。あれはイラン・ジャパン石油化学(IJPC)と言って、日本とイラン50/50JVでイランで最初の総合石油化学工場を建設する大プロジェクトである。しかしこのIJPCの歴史を書く気は全くなく、私が関係した仕事はほんの一部であり私の無責任なまさに「こばなし」の一席なのである。建設現場はイランの南にあり気温が40度の熱帯にあり、現場で建設

作業する日本人の技術者は多い時で3,000人おり、外で短時間働き直ぐ冷房のある所に避難した外での繰り返しとのこと。その3,000人が毎日食べる日本人の食材を送る仕事の一部にも私が関係していた。勿論私は食品は素人であり、食材を集めるのは日本の大手食品卸しの会社数社が協力して集め、その明細を輸出書類にするのは専門の会社かやる。しかし船積みする名義人、すなわち輸出者は三井物産以外になりようがなく、膨大な船積み書類にめくらサインをする人が私であった。仕事は分業制でやらぬと膨大な仕事はできない。食材の明細に私には責任はないが、書類を見れる立場にいたので、その食材の種類が1万ぐらいはあるのではと思うほど多いのには、いつも驚くやら感心ばかりしていた。当時米は日本からの輸出はできなくカルホーニヤ米を、牛肉はオーストラリアからで各支店が輸出者であった。

イラン革命が勃発し日本人は追い出されるように総引き上げたが、革命を成功した新政府から建設再開を熱心に頼まれ再開した。その中断の時に民間企業のリスクの限界を超えているとの判断で日本政府も一部出資しナショナルプロジェクト化を決定した。

建設再開したものの、そこで今度はイラン・イラク戦争が始まり、1発の爆弾がイラクから飛んできて建設現場に落ちた。こうなると建設どころではなく、現場から日本人は逃げるしかないが、戦争のためイラン空港は一般人は使えず隣国のパキスタン空港まで何んらかの方法でたどり着き日本に帰ったと聞いている。そこでこのプロジェクトから日本は完全撤退したのである。その時はプラントは90%近くできていたようだ。日本側は大損して撤退したわけであるが、完成させたのは韓国であると聞いたことがあるような、ないような次第。



私と妻



◆ 総合フードサービス事業 ◆

テンシヤル株式会社

代表取締役 大塚 廉造 (K・32卒)
相談役 大塚 洋夫 (E・35卒)

東京都中央区新川2丁目7番7号クレール八重洲ビル204
TEL(03)3297-1066 FAX(03)3297-1063